

「藤樹紙芝居」の紹介⑧

「遺徳を守る人々」

(解説)

この「遺徳を守る人々」の紙芝居は、二つの話を中心に構成しました。前半の話は、一人の武士が先生の墓を参拝したいとして、立ち寄った時の話で、藤樹先生が亡くなられてから百八十年あまり過ぎたころの話です。

農作業を中断してまで、自宅へ戻り、汚れた野良着を、新しい着物と羽織に着かえ、墓地まで親切に案内してくれる農夫の温かい姿に心打たれる武士の話です。この武士こそ、藤樹先生や大塩平八郎に関する文献をもとに考えると、陽明学を深く学び、広く伝えたいと言われる「大塩平八郎」であったと思われる。藤樹先生が亡くなられた後も、先生を敬う心や良知の教えが村人の中に深く根付いていることに感銘したと伝えられています。

後半の話は、小川村の大火という不幸な出来事が起きた時のことです。火事が起きたとき、村人たちは我が家より先に、書院の大切な書籍や物品を、力を合わせて無事に運び出しました。村の家の約半数を焼失したこの大火は、藤樹書院にも及んで、全焼したのです。村人の献身的な力がなかったら、何も残らなかつ



たこと
でしょ
う。

地元
の人々
の手に
より、
いつも
美しく
掃き清
められ
た書院、

季節の花々が添えられている墓所、清く流れる小川とともに、長く伝えられた良知の心は、引き継がれ、今も守り続けられています。

この話は、藤樹先生に関する伝え話(口碑伝説)の一つです。

先生は自ら「陰徳」の精神を実践し、村人たちにも夜講釈等で、「人に知られない善行の大切さ」を教えました。

(紙芝居)

① 中江藤樹先生が亡くなられてから、百八十年あまりあとのお話です。一人の武士が、遠くから琵琶湖の西近江路へ、旅をした時のことです。

武士「この辺りが、昔、中江藤樹先生という方が、おられたところだな。」

と、あたりを見回しながら、ひとり言を言いました。

武士「ようやく、ここまで来ることができた。是非とも中江藤樹先生のお墓をお参りしたいな。」
と、大きな街道から横道に入りました。

② 武士「藤樹先生のお墓は、たしか小川村だったな。」
しばらく歩いていくと、畑仕事をしている、村人に出会いました。

武士「そうだ、あの村人に聞いてみよう。」
武士は近くまでいくと、

武士「ちよつと聞きたいことがあるのだが。」
と、声をかけました。



村人「はい、私ですか。」

村人は手を止めて振り向き、その手は泥で汚れ、継ぎはぎで直してある仕事

着にも、泥が付いています。

村人「何かご用ですか。」
武士から声をかけられた村人が、

恐る恐るたずねました。

武士「手を止めてすまん。じつはこの辺りに、中江藤樹先生のお墓

があると聞いているのだが、知らぬかな。」

それを聞いた村人は、急にしゃんと、背中をのぼして言いました。

村人「藤樹さんのお墓でしたら、存じております。私がお案内いたしますしょう。」

村人が、先に立って歩き出しました。

③ 途中で、小さな農家の前まで来ると、

村人「少しの間、お待ちください。」

村人は、家の中へ入っていきまし



た。間もなく出てきた村人は、汚れた顔や手をきれいに洗って新しい着物と羽織に着かえていました。

村人「大変お待たせいたしました。」
武士に一礼をして、また、先に

立って歩き出しました。

武士「うむ、さてさて、これはまたなんとという男だ、着物まで着かえなくても、道さえ教えてくれたら

よいものを・・・」
と、思いながらついでいくと、間